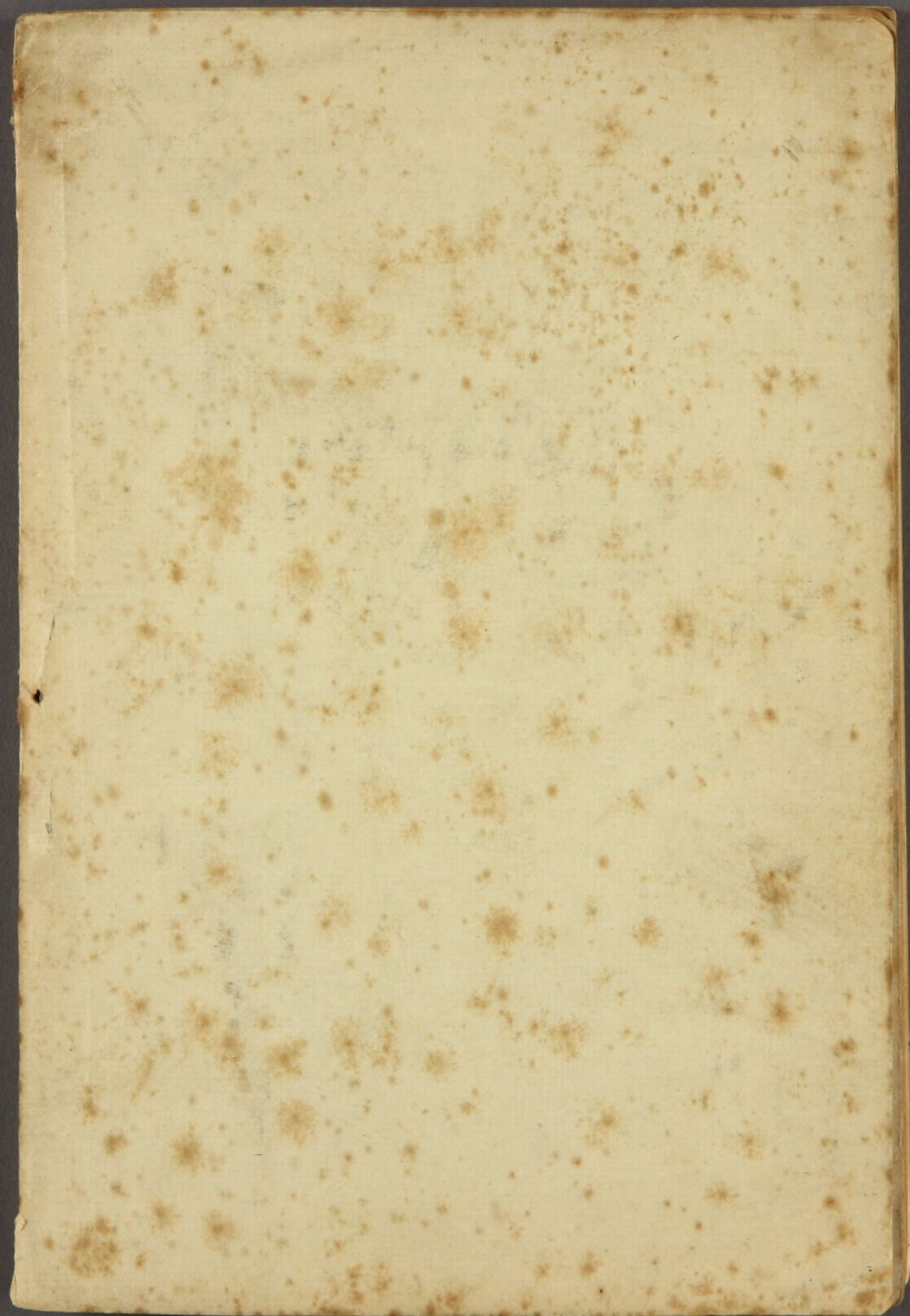
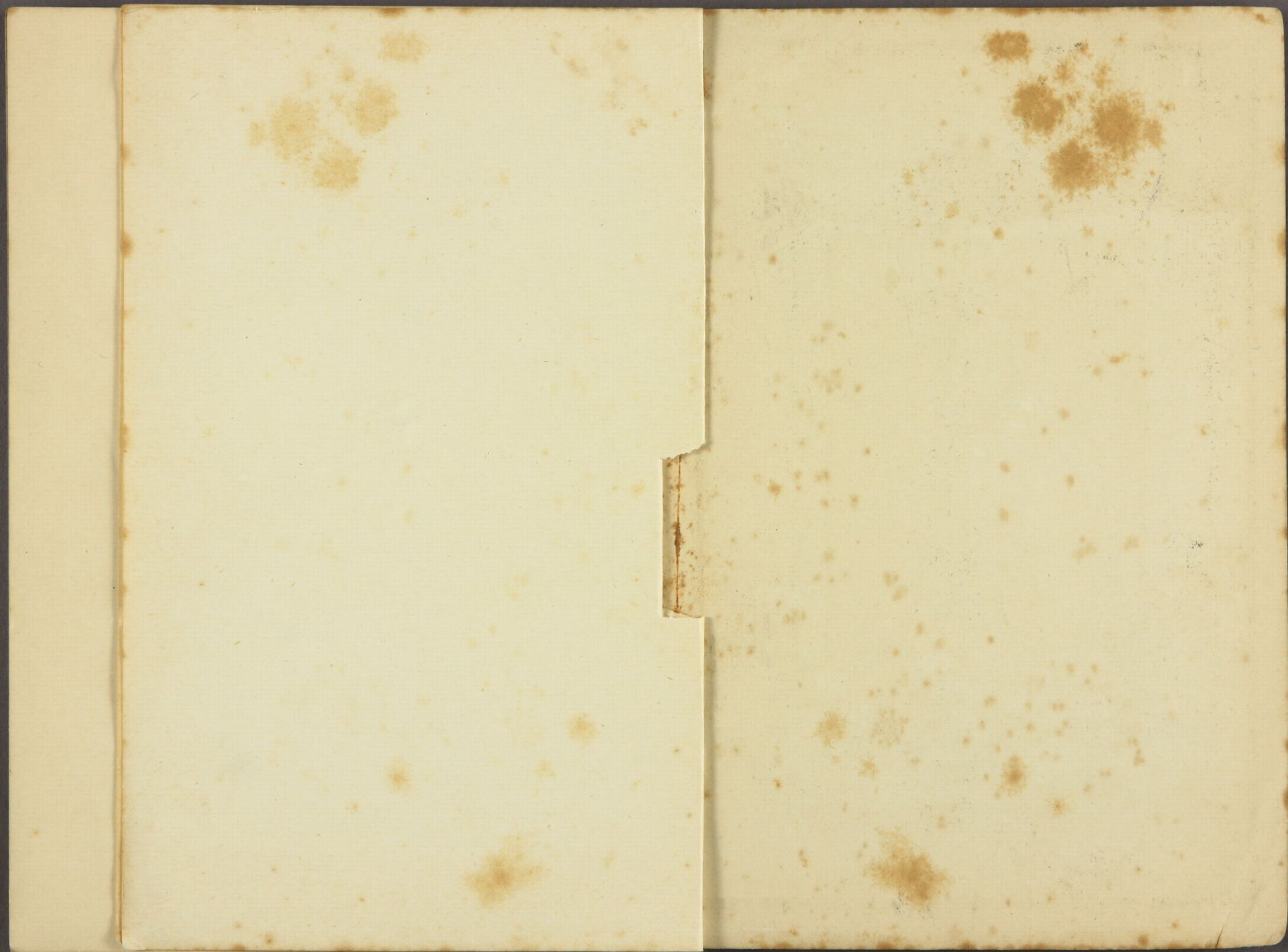


斜景詩









叙
景
詩

金尾
子上
薰柴
園舟
選

『叙景詩』とは何ぞや

野の鳥に聞け、朝の雲に希望を歌ひ、夕の花に運命を
ささやくにあらざや。谷の流に見よ、みなぎる瀬には、
喜の色をあらはし、湛ふる淵には、夏の影をやどすに
あらざや。

自然は、良師なり。よく吾人に教訓を垂れ、鞭撻を加へ、
神秘を教ふ。之をとりて素となし、之を以て彩となす。
天賦の畫、こゝに於てか成り、真正の詩、これに由てか

出づ。

詩と畫と、其極致に於ては、乃ち一なり。自然の景趣に
對して、揮灑縱横し、朝霞夕煙、風雲竹樹、悉く取て、片絹
隻紙の間に寓せしめ、而して、神秘の影、おのづから、其
中に動き、觀者をして、血の湧くを覺え、聽者をして、肉
の躍るを感ぜしむるもの、これ、畫の至れるところに
して、また、詩の極れる處なり。學んでこゝに至る、豈、他
あらむや、たゞ、自然に従て、之を寫すに在り。寫して、人

意を挿まざるに在り。

竊かに訝る、今時の詩に志すもの、たゞ、淺薄なる理想を咏じ、卑近なる希望をうたひ、下劣の情を據べ、猥雜の愛を説き、つとめて、自然に遠ざからむと期し、而して、眞正の詩、以て、得べしとなす、謬れるの甚しきにあらずや。新進の畫家、筆を深林廣野の間に試み、直に、天真を發揮せんと欲するに比せよ、其徑庭、果して、如何ぞや。

四

五

吾人、未だ、詩を知るの深きものにあらず。然れども、陋劣の情を抛ち、卑淺の愛を棄て、雲を寫し、森を描き、草舍竹木を咏じ、田園蔬菜を賦し、一往直進、自然の懷に入り、神秘の鍵を握る、彼の新進畫家の如くならむと欲す。これ、實に、詩の極致に達すべき捷徑なりと信ずればなり。

明治三十四年冬十二月

選者しるす

例言

一、叙景詩一篇、短歌三百首、悉く皆、新聲歌壇の粹を抜けるもの。景に對して情を思ひ、情に對して景を思ふ。多様な當時の歌壇、確かに、異色あるを信ずるなり。

一、評しきは、當時の歌なり。語は峻ならむを期し、調は怪ならむを欲す。而して、滿面得意の氣あり、慨すべき哉。吾人、こゝに鑑みるあり、乃ち、特に、聲調流麗、格律高雅なるものを取り、以て、此篇を大成するを期せり。唯、微力、よく鼎を扛ぐることを能はず、顧みて、忸怩たるもの多し。

一、加之、本書選述の事も、匆卒に發して、竟に、精煉陶冶するに、違なく、意を得ざるもの、管に二三に止まらざりしを憾ますむば、あらず。吾人乞ふ、他日を俟ちて、これを完備せむと欲す。諸君、諒せよ。

一、卷末添ふる所の卑作は、眞に、鶏肋に過ぎず。冀くは、これを以て、他に累を及ぼさざらむことを望む。



平福百穂 古城

叙景詩

(二百八十二首)……………一

敗蕉……………

尾上柴舟……………七六

寒菊……………

金子薰園……………八九

表紙……………

結城素明……………

古城……………

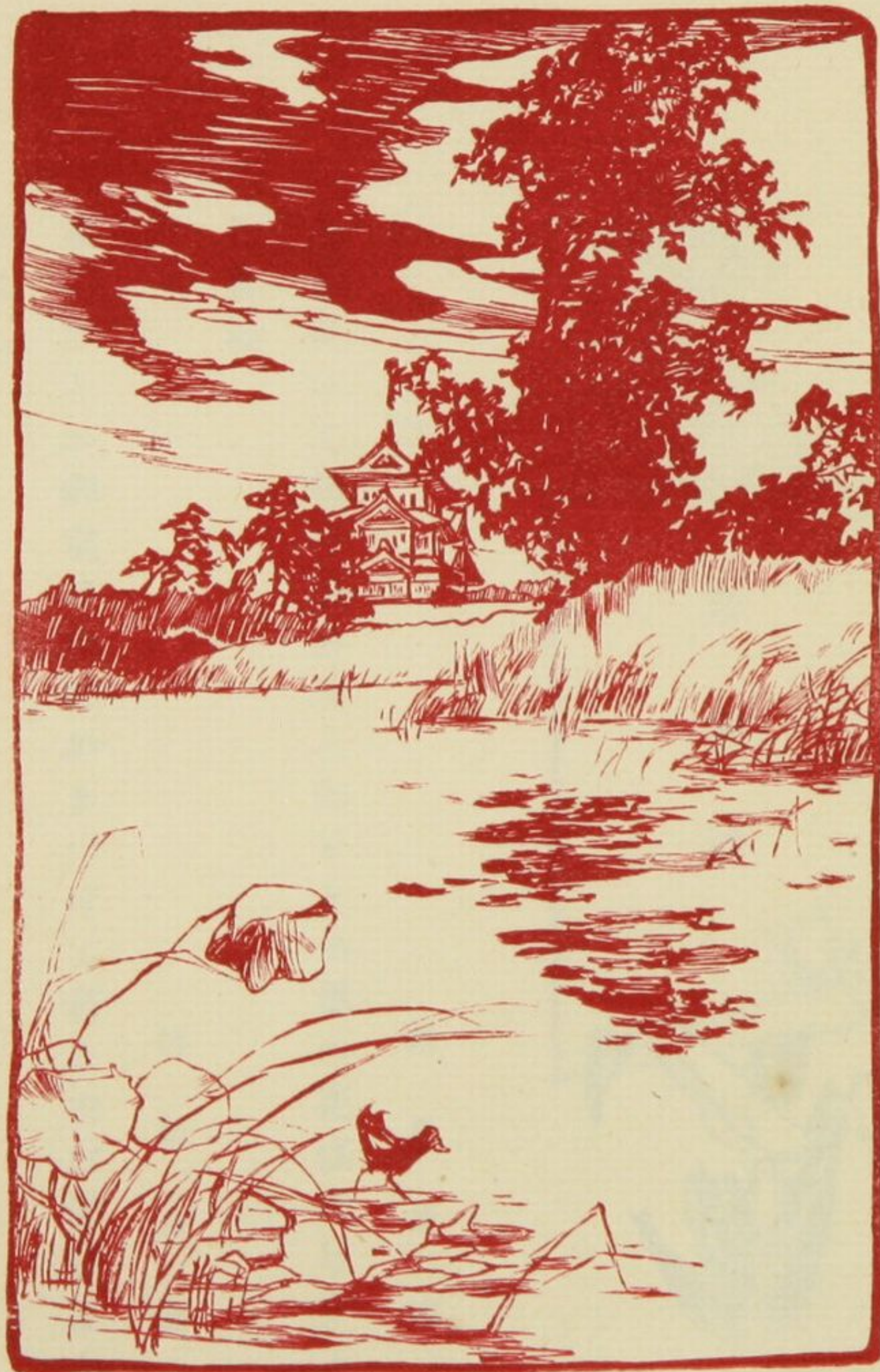
平福百穂……………

冬曉……………

結城素明……………

綠陰……………

平福百穂……………



平福百穂 古城

叙景詩

尾上柴舟

尾上柴舟 七六

表紙

結城素明

古城

平福百穂

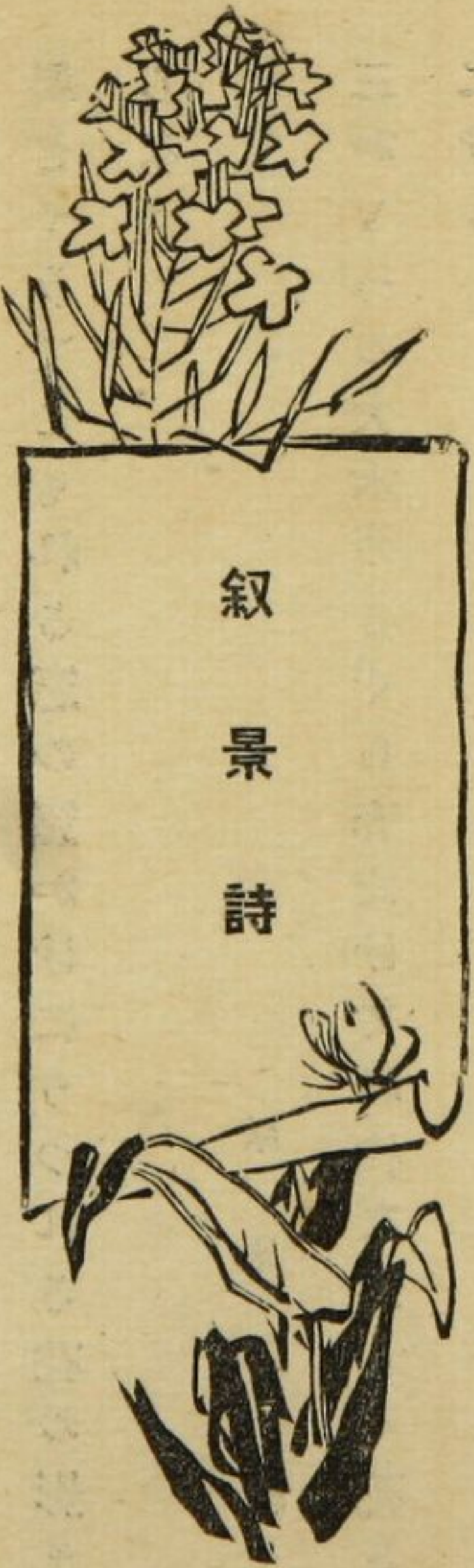
冬曉

結城素明

絲隙

平福百穂

二百八十二首



○ 關戸紫苑

○ 矢を負ひて雉子落ちゆく山もとの菜の花ばたけ夕もや
こめぬ

○ 河田白露

○ なにごとか御堂の壁にかきつけて若きたび僧花ふみて
いにし

朽木鬼佛

とぎれとぎれ笥の水のおとはしてさくらちるなり方丈
のまど

宮本袖浦

弾丸たまごのあとおほく残れる若松の大手のさくらはなさき
にけり

服部直一郎

風をやみてこもれる窓の窓かけにうつれる花の影まば
らなり

原見白雁

三かゝへの大木のさくら春たけて神代ながらの花さき
にけり

金子烏江

すみれ咲く岡にのぼりてなき友のひつぎあくりし寺の
花見る

朽木鬼佛

讀經とよやうやみて晝しづかなるやま寺の阿伽井の水に花ちり
うかぶ

福田義三

川下にうかぶかもめも見えぬまでゆふべしきり花吹
雪する

河田白露

ちる花に女御のみくるまあゆみおそし御室あたりの春
の夕暮

○ 武山英子

見送りし人のすがたの見えずなりぬ董さく野のおぼろ
夜の月

○ 益富冷雨堂

さくら咲くふるき都のおぼろ夜を笛ふきて行く公達も
あらず

○ 四島南峯

舞姫のち小さきあふぎぞうつくしき四條のはしの春の夜
のつき

○ 琴春二

みやしらの鈴ふきならすゆふ風にひろ前白くちるさく
らかな

四

五

○ 平井晩村

誰が墓にそなへむとてか花もちてをさな子入りぬふる
寺の門

○ 間枝蘇白

菜の花にすゝ菜まじれる山ばたには鳥なきて春のど
かなり

○ 朽木鬼佛

にはとりの聲あたゝかにきこゆなり菜たねはな咲く江
南の家

○ 野村董雨

うつくしき繪日傘のむれ過ぎゆきぬ菜の花ぐもり川沿
ひの道

○ 始 天生

菜のはなのはたの中みち嫁いりのひとむれすぎぬ月う
すき宵

○ 本尾秋遊

あたゝかき雨はれゆきて磯山の松おほきところ靄たち
のぼる

○ 白 繻

里とほき火葬のけぶりたなびきて小山のほとり菜たね
花さく

○ 天沼桃村

雲はあらず東つくばにかすみこめて田ばたの里の春長
閑なり

六

七

○ 阪本杭子

君が家のまるしとあふぐ老松の鳶のふる巢をかすみこ
めたり

○ 寺田桐月

見るがうちに夕の霞深うなりて星かげあはし妹が家の
あたり

○ 須藤鮭川

一すぢの砂利道ゆけば右ひだり菜のはなばたけ風のど
かなり

○ 阪本杭子

菜ばたけのつくるあたりを寺見えて胡蝶追ひつゝ、雛僧
の行く

○ 關戸紫苑

鈴菜さく小島をちかみたま〜に蝶舞ひくなり舟のへ
さきに

○ 須田李雨

雨ほそきうらの菜ばたけひなつれて菜の葉ついはみ鶏
あそぶ

○ 野村蘿雨

鶏をとやに入れおきて何となく背戸の菜ばたけ一めぐ
りしぬ

○ 及川清萍

毛糸をばあむ手やすめて菜の花をはなれし蝶の行方を
ぞ見る

八

九

○ 吉植愛劍

梅さけるわら屋の軒に日の丸のみ旗なびきてうぐひす
の啼く

○ 福田義三

御苑生にすみれ摘みますすひめ宮のあけのはかまに春の
風ふく

○ 賤男

水ぬるむかどの小川にふたつ三つ家鴨うかべり日は午
にして

○ 月曆

やけのこるみ寺の門のくちななぎ片枝芽ぶきて春のか
ぜ吹く

○ みすゝのや

かりそめに結びし妹があげまきの髪のはつれに春のか
ぜ吹く

○ 伊東金星

おぼろ夜を利根の川づら風たちてあしまにゆらぐふね
の燈火

○ カ石白鷄

おとうとの草紙干したる紅梅のはななきえだに四十か
ら啼く

○ 吉植愛劍

湯のたぎるおとばかりして南のうめさく窓のひるしづ
かなり

十

十一

○ 内藤夕波

苔むせるおくつきどころ白梅の花ちりやまで日は暮れ
にけり

○ 朽木鬼佛

水まろく梅が香さむき野のみちをさまよひをれば月山
を出づ

○ 須藤鮭川

なにげなくつま戸を押して中庭の梅のはな見るうす月
夜かな

○ 清野はま子

苦をあげて笛もちいでしあまの子のまらべも低し春の
夜の月

○ 宮崎 蕉 雨

うら庭の老木のうめの花ちりてうぐひす啼かずたゞは
るの雨

○ 服部直一郎

窓越しに見えし野でらのあらゝぎも霞にきえて春さめ
のふる

○ 新庄 竹 涯

名にたかき志ぼりの椿いろあせて春さめさむしてらの
おく庭

○ 奥原 東 雲

まめやかに春の雨ふるゆふぐれを志ら桃ちりて人はか
へらず

○ 福田 義 三

桃の花ちりてうかべるさと川にちひさき魚のさかのぼ
る見ゆ

○ 佐々木 寛 綱

牛のちゝ志ぼる男のかけ見えてまき場のあたり桃さか
りなり

○ 服部直一郎

母刀自がむそぢのいはひこよひすとよろこぶ宿に桃の
花さく

○ 尾 花 生

鶏のこゑにまじりてをりくは梭のおときこゆ桃おほ
きさと

賤男

○ 牛ひきておきな歸りぬ酒買ひておうなかへりぬ桃さけるやど

金子烏江

○ 野の末の古城よまきのあたり志ら桃の花ほの見えてゆふ日さすなり

秋星

○ 銃とさきにさげし獲物の雉子の羽に春のゆふ日のかげ美くしき

間枝蘇白

○ 春の菊芥子にまじりて咲くはたの中に干したり蛇の目から傘

十四

十五

池本奇璨

○ みづ車のどかにめぐるおとすなりやなぎ一里の川沿ひのさと

福田義三

○ 川沿ひのやなぎまだるゝ居酒屋の暖簾くゞりぬあみ笠ふたり

新庄竹涯

○ れんげ咲くはたの畦みちむつまじく花環造れりおとひ二人

寺田桐月

○ わか草にあそぶ羊のひとむれにやさしくあたる春の日のかげ

○

内田夕闇

やはらけき若草ふみてかへりゆくはたごの馬の鈴の音
ひくき

○

秋星

白鳥の飛ぶかげ見えてはら／＼と松のはなちるみさゝ
ぎの池

○

平井晩村

夕づく日荷駄入る門にてりはえて長者がのきの松のは
なちる

○

牛田曉月

藤の花ながく垂れたる孔雀小屋ひるまさびしく小雨そ
ぼふる

十六

十七

○

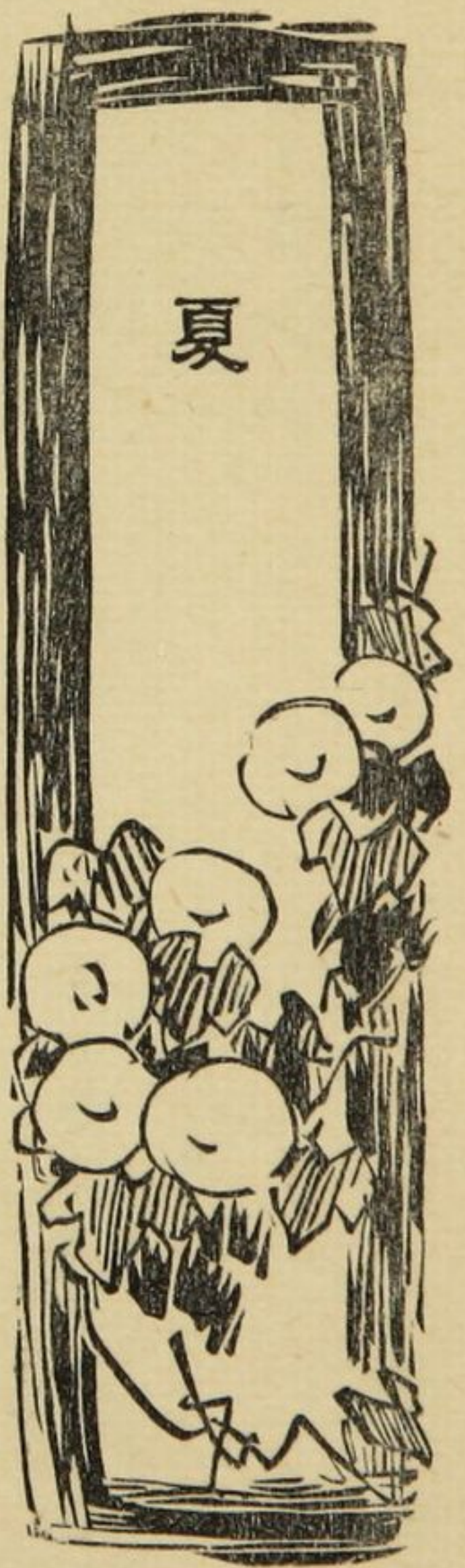
川田靄溪

行き／＼てつきぬ山路のつくるところ白藤さきて日は
斜なり

○

三栖董汀

ゆふかぜに南圓堂の藤ちりて錆びしつりがねおのづか
ら鳴る



○ 兒島青嵐

下加茂のまつりひるより雨になりてぬるゝ冠の人うつくしき

○ 本多杏汀

大河をのぼる白帆の帆ばしらにつばめむらがる朝ぼらけかな

十八

○ 木曾滋

新墾の桑ばたとほく富士見えて桑つむうたのこゑのどかなり

○ 岡 稻里

桑の葉をつみし小舟に棹とりて橋のした行くさとのをとめ子

○ 岡本春陵

いたち出でゝ背戸に鶯鳥のなきさけぶ夏の眞晝を栗の花ちる

○ 西島南峯

山伏のあしのよわきが行きすぎぬ松ばら三里さみだれのころ

十九

○ 西島南峰

苦ふきし小舟ふたつに日は暮れてあし原づつみ五月雨のふる

○ 谷村醫峯

村をさの住むてふ岡のかぶ木門鯉ののぼりのふくらかに立つ

○ 西澤蘆園

森かげに五月のぼりのゆらぐ見えて田舎の夏の晝しづかなり

○ 上村紅林

柏手の音にあけゆくみやしろの森のわか葉にあさ日てりそふ

二十

二十一

○ 内田夕闇

わか葉さす森のしたかげ雨はれて色づきそめし草いちごかな

○ 金子烏江

あたゝかきあしたの空に雲いでゝ白木のみや居たち花のさく

○ 福田義三

方丈のさび竹の椽人氣たえてゆふべまづかに棕櫚のはなちる

○ 竹堂

去年の秋やけのこりたる米倉のよこのふる杉わか葉さしたり

内田歌夫

あたゝかき神のみ息やふれつらむ草むらがくれ覆盆子
色づく

大井波葉

いちご實る野川の岸をひつじ追ひてかへる童のくさ笛
きよき

西尾董汀

あかき花そろひて咲きぬわが庭のあふひふたもとたか
さ三尺

横山昼樓

庭の隅の背低燈籠の苔ぬれてかしの這ふ見ゆさみだれ
のころ

二十二

二十三

矢ヶ崎賢次

雨にぬれてかきつばた折る手弱女の小傘かすめてとぶ
燕かな

伊東茂々樓

燕とぶはしのたもとにたゝずみて妹が家見るゆふべす
いしき

植野鴨村

清水くみて青葉にそゝぐ朝な／＼まつのせみきく山科
のさと

中島葩香

山鳩のたつ羽ばたきにねむの木わか葉ゆらぎて日は
斜なり

○ 水車ゆるくきこゆるわら小屋の背戸にさきたり志ら百合の花

○ 鹿島霜風

○ 夏ぐさのまげみが中に百合さきて迷ひ入りけり志ろき胡蝶の

○ 折竹曉夢

○ 溪あひに霧たゞよひて日はくれぬ百合の花の香たゞ身に迫る

○ 若葉しげき林のおくのはて見えてちひさく咲けり白百合の花

○ 絹水郎

○ うす絹の圓窓なかばおしあけて蚊帳かやごしに見る志ら百合の花

○ 遊佐蒲月

○ 朝雨にぬれつゝあそぶには鳥のなく音しづかに豆のはなちる

○ 登阪北嶺

○ 葉柳の雨やゝしろきあけがたを軒のともしのかげうすれゆく

○ 鷹尾

○ ゆふ月に馬うち洗ふ賤の男にやま路を問へばなくほととぎす

やけ山のふもとの茶屋に駕籠ありてやすらひをればな
く郭公

豆腐買ひてかへるはたみち月いでゝ一聲なきぬ山ほと
ゝぎす

○ 本多 杏 汀

湯の宿の窓の若葉に雨ふりて火ともしごろを啼くほと
ゝぎす

○ 冷 雨 生

ものゝふの矢ぶみをよめる篝火に松風ふきてほとゝぎ
す啼く

○ 奥 原 泣 薊

雨はれしまつばら過ぐる旅人の小笠のうへになくほと

ゝぎす

○ 寺 田 桐 月

西に急ぐ朱塗の駕籠の見えずなりてほとゝぎす啼く明
方の空

吉 植 庄 亮

燈^{ともし}つけて公達弓をきそひつる那須野のはらに啼くほと
ゝぎす

○ 洲 羽 修 文 郎

雨はれてなくほとゝぎす一こゑに一里松ばら月はいで
にけり

○ 益 富 冷 雨 堂

姫君の御惱^{ごなう}とふべくわた殿を紙燭^{しそく}さしゆけば啼くほと

しぎす

○ 福田 義三

牛ひきてたがへす笠のかつ見えて青田にうつる晝の月
ほそし

○ 山口 吟風

立山のみねよりいでくくりからの峯にあげたるなつの
夜の月

○ 登阪 北嶺

水打ちし竹の葉ずゑに月見えて十歩のにはぞすゝしか
りける

○ 洲羽 修文郎

撫子をはしらに活けて木の芽にる敷寄屋の晝の雨しづ

二十八

かなり

○ 内田 夕闇

夕立は波のうへ遠くすぎゆきていり日にほへり虹のま
つばら

○ 野村 堇雨

ゆゝしくも垣めぐらせる村をさの家ひろ庭きりのは
なちる

○ 朝倉 雨月

みやしろの鈴ふきならすあさ風に池のはちすの花ひと
つちる

○ 荒木 枯園

つきやまにみづをうたせて竹椽に今のおとこの酒くみ

二十九

たまふ

○ 岡 稻 里

みやこより訪ひ來し友と窓をあけて青田のすゑの夏の
山見る

○ 福 田 義 三

山かげの青田にいこふあらさぎの三つ四つ見えて日は
斜なり

○ 岡 本 春 陵

大連のみなとのあたりあめやみて金州のそらにじよこ
たはる

○ 二 神 蘭 圃

沖見つゝまばしいこひぬ峠路のひるま涼しきまつかげ

三十

三十一

にして

○ 伊 東 茂 々 樓

さ夜ふかく涼しき風をひとりしめて加茂川づつみ笛ふ
き下る

○ 若 林 醉 霞

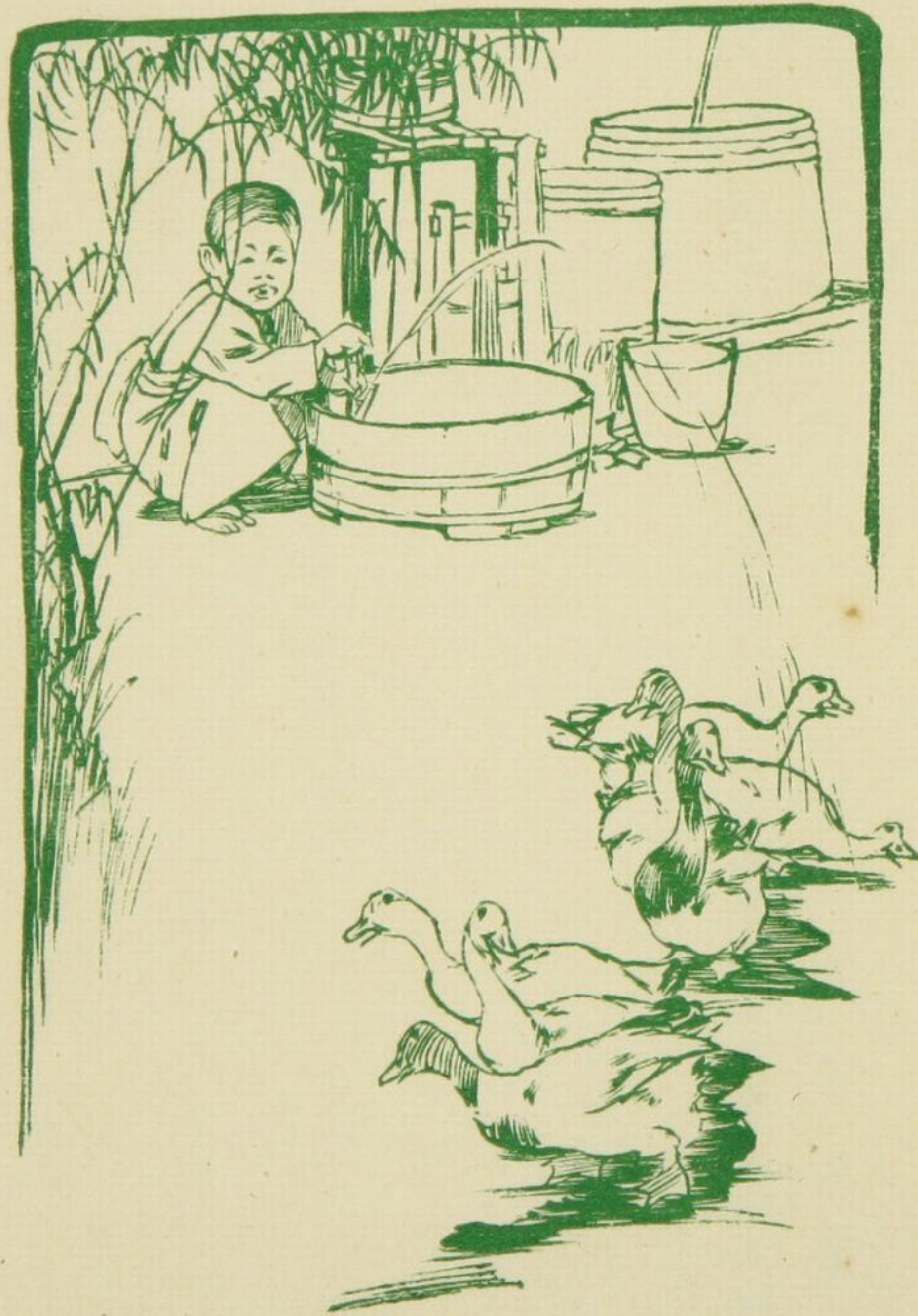
犬つれてほたる追ひゆくおとうとの足もとあやし畑の
中みち

○ 滋 雄

雨やみてふく風薫るこのゆふべぬれしほたるの青すだ
れ這ふ

○ 西 村 松 雨

露しげき野邊のすゝきに隠れたる辻堂見えてほたる飛



穂百福平

蔭 緑

ぶなり

○

川合長流

夕月のすこしもりくる木のもとに馬洗ふ湯のゆげほの
じろき

○

矢ヶ崎柴垣

蚊やり火のけぶりたなびく背戸畑に長き糸瓜の風にゆ
らぐよ

○

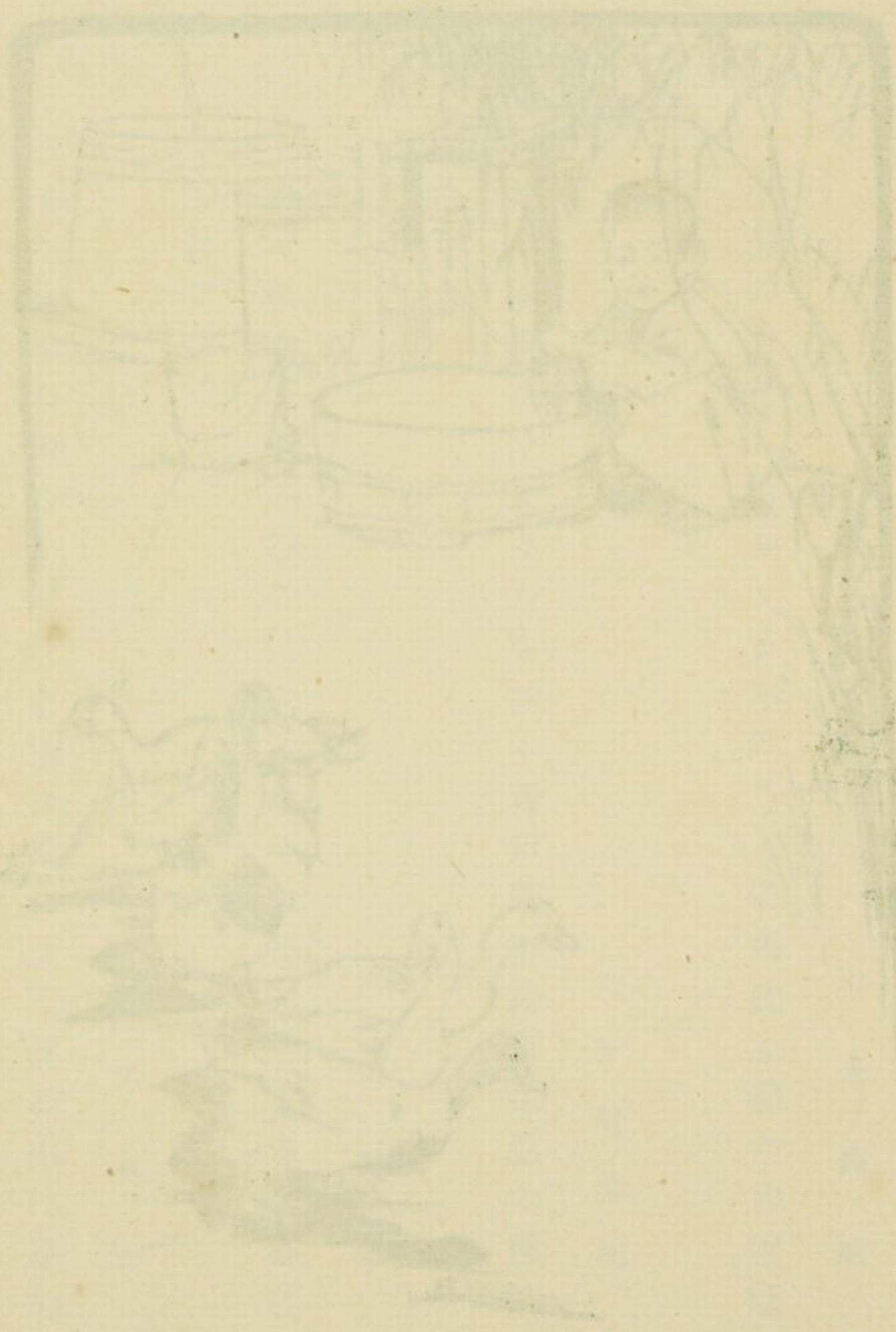
内田紫翠

みだれたる玉蜀黍のはなのうへに蜻蛉あきつとまるよ風にふ
かれて

○

福田義三

はたごやの軒のすだれを捲き見れば三笠の山は夏かす



みせり

○

櫻木良雄

妹は日傘かざして日をよけぬ今朝さきそめしあさがほ
のはな



○ 川合長流

○ 亂れたる雲をさまりて森のうへに二十日の月の影さや
かなり

○ 折竹曉夢

○ 草刈りのわすれゆきけむ鎌の刃はにつゆも宿りぬ月もや
どりぬ

○ 絹水郎

三十四

三十五

○ 葦間ゆく小舟に琵琶のおとすなりいそべの松に月清き
ゆふべ

○ 吾妻耕一

○ こほろぎのなく音さびしく夜は更けて桐の木高く月す
み渡る

○ 川合長流

○ 秋たかき楨の木ずゑに月すみて鳥の羽ばたくおときこ
ゆなり

○ 高戸菱花

○ 盆燈籠かけほのぐらき軒のはを蚊遣のけぶりいくめぐ
りしつ

○ 荒木枯園

はねつるべきしる籬の糸すゝき二すぢ三すぢ穂にいで
にけり

○ 鈴木 董 村

ふたつ三つ蜻蛉あきつ飛ぶなりともし火のともりともらぬ川
面の里

○ 高 日 静 江

繩朽ちし垣にからまるあさ顔も實がちになりて雁なき
わたる

○ 長 谷 川 喬 村

雨そゞ庭の芭蕉のしたかげに立つには鳥の身ゆるぎ
もせぬ

○ 岩 淵 白 梅

ふづくゑにひとつちり來し桐の葉にあやふくすがる蟋
蟀かな

○ 印 南 里 人

水あとのうら手の庭はあれはてゝ草の月夜にきりく
すなく

○ 荒 木 枯 園

螳螂をのせたる桐のひと葉おちぬはき清めたる庭のい
さごに

○ 北 村 志 良 郎

新しき卒塔婆のあたりとぶ蝶のつばさつめたくさす夕
日かな

○ 内 田 夕 關

夕づく日葡萄の房に照る見えてびあの聞ゆる妹がすむ
あたり

○ 西村松雨

さかり過ぎて鉢をぬかれし朝がほの枯葉にのこる秋の
日の影

○ 金子烏江

馬子ひとり入日背にして多摩川のいた橋わたる秋のゆ
ふぐれ

○ 武山英子

幣ぬきを手に雁を見おくる人わかし加茂のやしらの秋のゆ
ふぐれ

○ 須藤鮭川

三十八

三十九

池殿のあけのおばしま人たえてはすのかれ葉にゆふべ
雨ふる

○ 荒木枯園

河に沿うてかや原一里家もなしゆふ月すごくあきのか
ぜ吹く

○ 雪布

羽づくろふ鳩の羽一つ軽く落ちて秋のゆふべを雨ふり
いでぬ

○ 鹿島霜風

めぐり来てむかし住みたる村に入りぬ芒さびしき秋の
夕ぐれ

○ 和田吹雪

うぶすなの森に夕日はかたぶきて背戸の蕎麥ばた秋の
風ふく

○ 須藤 鮭川

尾花さく野川のつゝみ風見えて晴れたるそらに鶯たか
く舞ふ

○ 高橋 葦水

さきのこる籬の桔梗いろあせて小雨ながらに日はくれ
むとす

○ 朽木 鬼佛

ねやの灯ひのひかりうするゝおく庭の秋海棠に小さめそ
ぼふる

○ 武山 英子

四十

四十一

几帳たれて中宮ひとりものおぼす里の内裏にむらさめ
のふる

○ 須藤 鮭川

夕餉たくけぶりほのめく垣との外との木槿のはなに小雨そ
ぼふる

○ 岡 稻里

うちわたすつゝみ十里の秋のみづに流るゝべにや夕や
けの雲

○ 高日 翠園

からす瓜這ひのぼりたる鐘樓にかねはあとせずたゞ秋
のかぜ

○ 本多 杏汀

法の師のかき根つくろふ木缺にこぼれてかゝるあらゝ
ぎの花

○ 福田 義三

巖かけの石のほとけの膝ちかくかをりそめたり蘭のひ
ともと

○ 櫻木 良雄

夜のいろは森のかげよりせまりきて綾瀬あし原風まろ
う吹く

○ 南 溪

金屏にともし火のかげほの白きあけがたちかく雁にし
に飛ぶ

○ 福田 義三

四十二

四十三

秋風にまら帆まきあぐる大船の帆ばしらかすめ雁なき
わたる

○ 鈴木 堇村

粟畑のまなかに立てるひとつ家には鳥なきて秋の日
黄なり

○ 丸林 好翠

五つ六つあきつみだれて粟の穂のなびくゆふ畑あきの
風ふく

○ 須藤 鮭川

まづの男が稻束はこぶかり納屋のうらの榎にゆふ日さ
すなり

○ 北村 桃波

刈穂負ひてをとこ女をみなのかへりゆく稻田のすゑに夕けぶ
り立つ

釜川

読みあきて草におきたる書よみの上にちさき蜻蛉あきつの去りて
又くる

村越雲外

うすき羽はに秋のゆふ日の影うけて蜻蛉あきつむれ飛ぶ枯あし
の上に

野村董雨

鶏頭にゆふ日うするゝ小柴垣さゝやくあぶのこゑまづ
かなり

荒木枯園

四十四

四十五

やすらかに厄日やまひすぎたる畑なかの鶏頭の花にゆふ日か
とやく

澤田伏猪

竹の戸をひらきて見れば野はひろし行く水長し秋の山
やせぬ

野村董雨

街道のひとともと榎かぜたえてうすきゆふ日にもずなき
しきる

小川小波

岡の上に家一つ見えてまぶ柿ののこる木末にもずなき
しきる

秋涼

乗りなれぬるなか車にたゞ一人野道すぎ行けば鴟ぞな
くなる

○ 平井 晩村

やなぎかげ酒賣る家のはたさびしゆふかせさむき信濃
路の秋

○ 阿部 静江

柴おひてかへるゆふべのすゝき原あき風さむく鹿のこ
ゑする

○ 咲良 露人

妻をよぶ籠のうづらのこゑさびし萩のみだれのいとあ
もき夕

○ 河田 白露

四十六

四十七

うつくしきみ魂たまを負ひし白き鳩の今日も歸らで秋の日
くれぬ(薄氷女史の追悼に)

○ 栃木 鬼佛

檜枯れ卒塔婆くちしおくつきに知らぬ秋ぐさはなまし
ろなり

○ 大堀 蓼子

さ夜ふけて經よむ窓の灯ともしうすれ阿伽井のほとり虫なき
しきる

○ 小田 宮華溪

には鳥の午のときなくこゑやみてあたゝかき日に木犀
かをる

○ 森脇 錦水

伏屋ありめぐり畑あり菊咲きてあるじのおきな鉄もち
てあり

○

岡 稻 里

道ばたの一もと野ざく雨にぬれてとまれる蝶の羽おも
げなり

○

佐 久 間 穂 峯

狐ひとつ出でがくれして川沿ひのさゝはら一里雨にく
れゆく

○

川 合 長 流

文車とくまのひゞきにすこしこぼれけり床に活けたるあら萩
のはな

○

井 倉 素 月

四十八

四十九

いもうとの月にそなへし穂すゝきに虫のきてなく文机
のうへ

○

福 田 義 三

燈籠の火影うするゝきざはしに虫の音ほそく夜はあけ
むとす

○

長 谷 川 喬 村

瀧のおとちかくきこえて夜よるの氣にころも手志める箱根
山みち

○

關 戸 紫 苑

松山のあさ霧はれぬ日はさしぬ駒にむちうつそのうし
ろかげ

○

吟 月

繪の筆をたにの清水にあらひをれば峯の松原きりうす
れゆく

○ 兒島青嵐

わたし舟呼ぶこゑ遠くこだましてひろき川面きりにく
れゆく

○ 吉田朝房

うすれゆく月影さしてひとむれのからすなきたつ峯の
あさ霧

○ 須藤鮭川

ありあけの月かげ淡き野のすゑの狭霧の上に富士しろ
く見ゆ

○ 河田白露

五十

五十一

わかれ來し里はさざりに見えわかず峠三里のあめのゆ
ふぐれ

○ 大堀蓼子

夕日さす野べのかやはら風たえて蜻蛉あきつ飛ぶなり高く又
ひくく

○ 川合長流

みぎせむか左せむかとなゆたへる橋のたもとを蜻蛉あきつ飛
びかふ

○ 井倉素月

亡き母のおくつき訪へば草むしてひるも虫なく花筒の
あたり

○ 荒木枯園

弟の野邊にとらへしくつわ虫はやかごなれてなきいで
にけり

○ 關 戸 紫 苑

あしの花の蔭にかくれて洲のさきにふと現れし君が小
ぶねよ

○ 千 葉 夕 浪

木の實はむ栗鼠のこゑして秋ふかき岡べのはやし晝静
かなり

○ 長 谷 川 喬 村

うちわたす葡萄ばたけの末遠くむらさきにほふ富士の
雪見る

○ 武 山 英 子

五十二

はぎすゝき桔梗かるかや藤袴みなたけのびてうらがれ
にけり(秋の末、百花園にて)

○ 中 島 葩 香

銀燭に雨のもみぢをてらさせて國のつかさのうたげし
たまふ

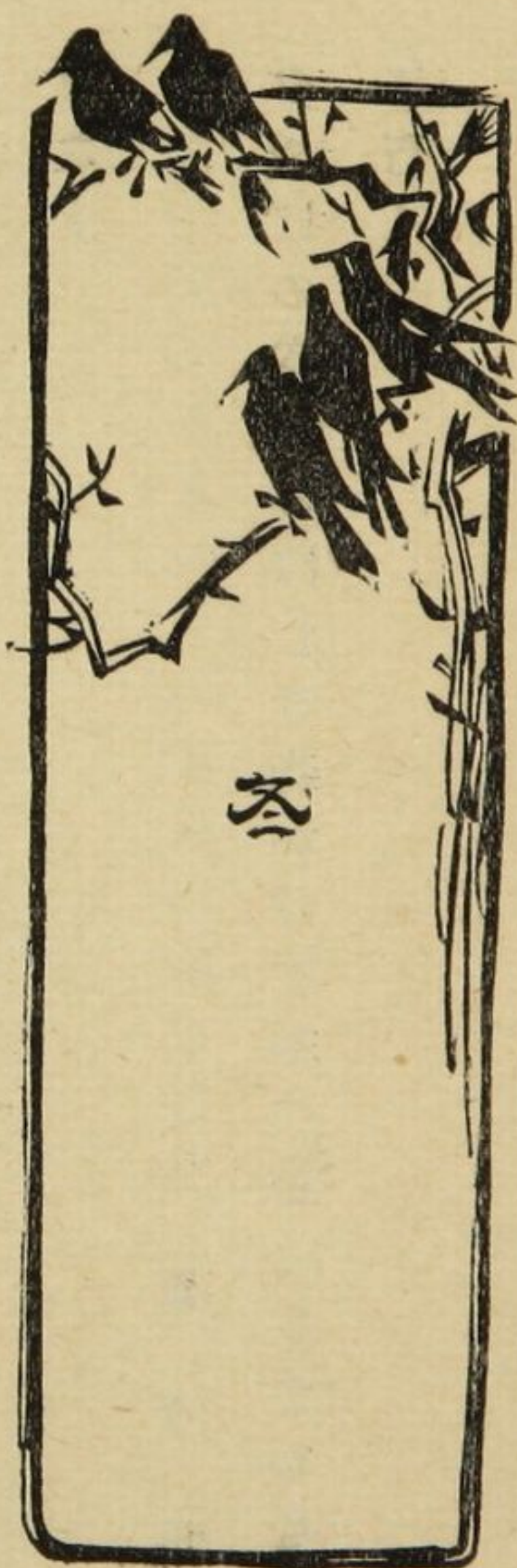
○ 鳥 取 指 滴

夕げたくけぶりめぐれる賤が家の柿のもみぢに入日さ
すなり

○ 千 葉 夕 浪

夕やけの空うるはしき森かげを黍つむくるまおもむろ
に行く

五十三



○ 福田 義三

鷹がりのぬり笠あまたかへりくるかれ野のゆふべ霰たばしる

○ 岡田 袖静

山ひくく菩提樹たかき村はづれふゆの夜の月やゝなゝめなり

五十四

五十五

○ 本尾 秋遊

冬枯の野路のゆふべを小ばしりに賤の男ひとり鍬かたげ行く

○ 須藤 鮭川

夕まぐれ野みちをいそぐ小ぐるまの幌にたばしるたま霰かな

○ 鈴木 天美

あかくくと夕日てりたる塔の上に昨日の雪のなほのこるかな

○ 洲羽 修文郎

垢離小屋にこりとる人はたえはてゝ瀧つぼさむし冬の夜の月

○ 川上瘦梅居

枯あしに木がらしわたる月の夜を千鳥きくかな苦ぶねにして

○ 本尾秋遊

散りはてし銀杏の枝に二十日あまり五日の月の影さえわたる

○ 大宮鈴子

木枯のふきすさぶ夜を伏屋よりたえむばかりの志はぶきの聲

○ 小川聖學

木がらしに駒いなゝきてとぎれとぎれ騎兵すぎ行く明方の月

五十六

五十七

○ 松井文彦

巖かげに膝をりしきてねらひよる銃の手寒く木がらしの吹く

○ 福田義三

木がらしの吹きからしたる芒はら囚人のせし駕籠の行く見ゆ

○ 眞優美

もりかげに枯枝たきて落栗を焼くうなるらの頬のあかきかな

○ 兒玉星人

森かげに一人はなれてあそぶ子の小さき袂にいてふひろへる

○ 寺西秀吉

たゞひとり椎の實ひろふ山寺に馬なきやみて日かげう
するゝ

○ 岡 稻里

柳ちるつゝみのみちを雨にぬれて家鴨のむれの今かへ
り行く

○ 高橋翠柳

もみぢせし梨の葉おつるゆふぐれに小雨そぼふるおほ
森の里

○ 雨月生

千曲川みぎはのあしの末枯れてうすきゆふ日のかげ寒
きかな

五十八

五十九

○ 長谷川喬村

糸つむぐくるまの音にから猫もねぶりもよほす埋み火
のもと

○ 岡田袖靜

徳たかきひじりおはせし山でらの庭の山茶花はな咲き
にけり

○ 福田義三

鶏はとやにかへりてつみ藁のうへにさびしくまぐれふ
るなり

○ 刀白園

まぐるべく雲おもき夜の甲板に月なき茅葺のうらを見
るかな

○ 原 柳 涯

水かれし野澤のあたり鴨たちてあしの葉さむきありあ
けの月

○ 佐 藤 笛 秋

うなるらがいろは書きたる跡さやかあく霜しろき欄干
の上に

○ 志 田 香 風

霜枯れて色黄ばみたる小なすびに片足折れしきりざり
すなく

○ 長 谷 川 喬 村

水やせてあらはれいでし石の上にあさ霜見ゆるほそ流
れかな

六十

六十一

○ 舟 木 紅 露

○ 雛僧のあか汲むすがたあはれなりおく霜さむきてらの
あさ庭

○ 岡 稻 里

うす雪のつもりし庭にこのあさげこぼれし松葉には鳥
のあと

○ 相 馬 御 風

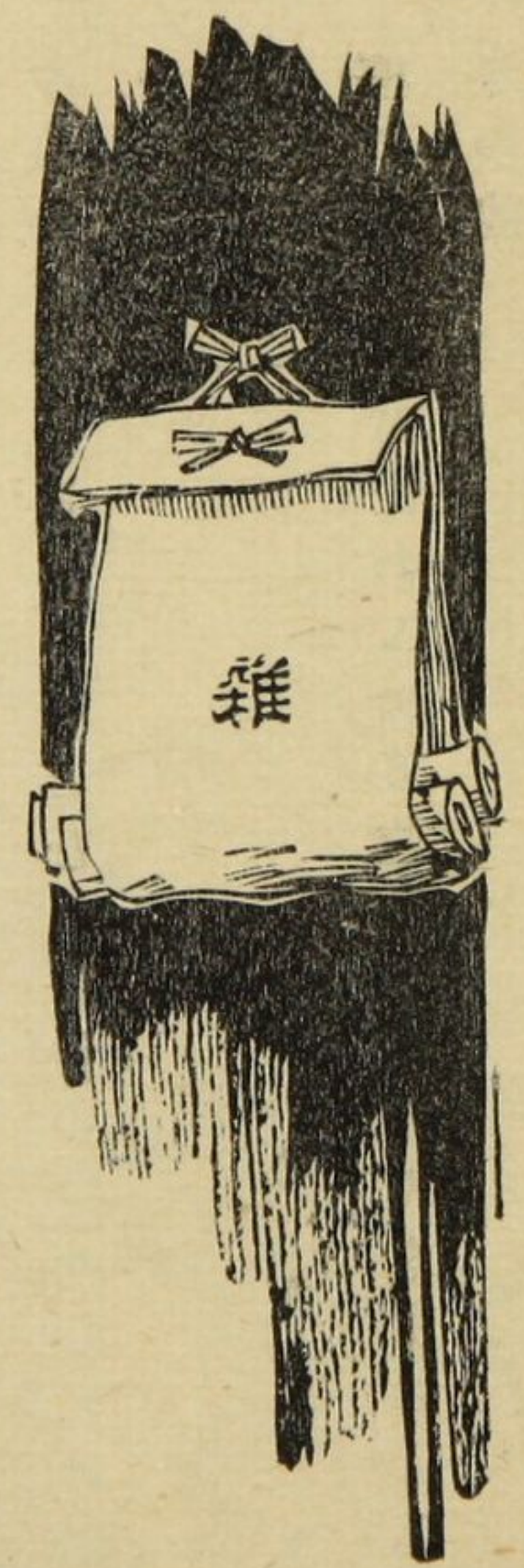
○ ちら鷺のゆくへを雪に見うしなひてさつをたゝずむ小
沼の夕

○ 森 脇 錦 水

○ 狙ひきの小猿負ひつゝ行きくれて迷ふやま路を雪ふり
しきる

○ 吉植 愛劍
一雁のこゑさむきあしたに庭のすみの鉢の水仙ゆきまば
らなり

○ 上條 穂舎
ところ／＼小^ちさく優しき手のひらの跡さへ見ゆる雪違
磨かな



○ 河田 白露
むらさきの雲たなびける峰のうへに白き男鹿のはな脚
み立つ

○ 森 天 葩
獅子ほえて椰子の木ゆるゝ夕まぐれ星閃きぬ金字塔^{ピラミッド}の
うへに

○ 阪本 杭子

舟はあらずふなうた葦にきえゆきて岸にさしやくゆふ
汐の音

○ 本多 杏汀

いくさはてし大野の末のあけがたに荒鷺一つ血にあき
て飛ぶ

○ 山脇 晩溪

夕日かけ斜にさせるひとむらの竹のはやしにけぶり立
つ見ゆ

○ 松井 文彦

檜の木の枝もたわゝに五位鷺の羽だたきするよみさし
ぎの池



明 兼 城 結 曉 冬



○ 福田 義三

みたまやのみ池にあそぶ丹頂のはねにちりくる松のこぼれ葉

○ 原 柳 涯

霏こめし松原あたり松葉かくひなうたひくしゆふぐれのはま

○ 川 合 長 流

森かげに七日の月は隠れゆきていづこなるらむ五位鷺のこゑ

○ 高 島 洒 峯

看^{かん}經^{きん}のかねの音さむきやま寺にあかつきたかく五位鷺のなく

○ 長谷川喬村

はゞき星かくれし峯の檜原より缺けにかけたる月出で
にけり

○ 原柳涯

一つ家^やのともし火きえて里川のせゝらぎひくく月ふけ
わたる

○ 阪本杭子

篝火の火かけかすかに夜はふけて警固の武士の聲ねむ
げなり

○ 川田靄溪

風あれて雲ひくき夜をますらをが家のふみ見るかゝり
火の影

六十六

六十七

○ 内田告天子

小夜ふけてわかれの酒はつきはてぬ二十日の月は斜に
なりぬ

○ 折竹曉夢

この山のひがし三里にひろき野あり鋤拾はゞ小雨ふる
といふ

○ 阪村榮治

夕日かげ淺間に落ちてをつくばの峯にたなびくむらさ
きの雲

○ 千歳江納

大きなる耕鯉しづかにうきいでぬ夕日にほへる中島の
あたり

○ 原見白雁
川沿ひのながきひと村たそがれて岸のあしはら三日月
ほそし

○ 落花村

網を干すはまべの松に日は落ちて沖よりかへる舟うた
のこゑ

○ 千葉夕浪

隊商の騎馬の一むれ見えざなりて千里の沙漠日は落ち
むとす

○ 内田夕闇

明星はかすかになりて荒波のよするいはほにかもめ羽
だたく

六十八

六十九

○ 星巒樵夫

ありあけの月影くらき波の上に白きかもめのあまた飛
ぶ見ゆ

○ 内藤夕波

波を追ひ波に追はれてあまの子があそぶいそべに鷗む
れ飛ぶ

○ 平井晩村

むらすゝめ飛びゆく藪に日は落ちてひとりきしめく水
車の音

○ 金子烏江

雨はれてうす日さし入る奥殿に小^ちさき畫像のうつくし
きかな

○ 長谷川 喬村

子守うたかどにきこえて人かけの窓にうつろふ夕づく
日かな

○ 本 多 正

馬の鞍に酒だるむすびゆふぐれをひともと松のさかの
ぼる人

○ 千 葉 夕 浪

乗りすてし葦間の小舟ゆらめきて夕日さびしく潮のみ
ちくる

○ 木 村 種 規

三井寺のかねのひきは湖うみにきえて夕日うするゝ瀬田
の長橋

○ 三 井 荒 川

庭池のみづさらひをれば水をあさみ大魚小魚藻にかく
れあふ

○ 兒 島 青 嵐

ひらくと橋より落ちし扇のせて舟は見るく舟にか
くれぬ

○ 原 柳 漕

あし原にゆふ風たちてかすかにも白き帆見ゆる利根の
川づら

○ 石 田 幽 夢

松山のとり居朽ちたるみやしろに鳩のこゑする雨のゆ
ふぐれ

○ 中島 夕月
ふるびたる幣^{ゆき}ゆひつけしみやしろのうらの老杉神さび
にけり

○ 植野 鴨村
舟にして召すやこよひの筑紫琴つまおとほそく波にき
えゆく

○ 阪本 杭子
うす月夜はしのあなたに舟見えてすみ繪に似たり投^と網^{あみ}
うつ様

○ 武山 英子
見かへれば香のけぶりのほのかにて手向の花に風そよ
ぐなり

平井 晩村

○ 一もとの峯のあか松もやこめてほのかに鳥のこゑきこ
ゆなり

玉水 生

○ 月あはし背ぶり多良岳ゆめに似て波しづかなりありあ
けの海

長谷川 喬村

○ 馬子唄のきこゆるかたに松並木ひとむらくろしありあ
けの月

梅澤 保

○ ありあけの月を背にして行く馬子の唄を低き松なは
てかな

○ 鶴飼翠溪
森かけをけさもたづねて書よめばかしらの上に五位鶯
のなく

○ 須田李雨
かけ茶屋に草鞋かへてのぼりゆく一里さかみちかる石
おほき

○ みすゞのや
悲しげにかたるところして影ふたつ木かけに黒しうしみ
つの頃

○ 櫻木良雄
星ひとつきらめく岡の杉のうへに聲ものすごく啼くは
なに鳥

七十五
上野鼓陵

○
ふる寺の土塚くづれし石間より朱蘭ひともと匂ひいで
にけり

○ 本多杏汀
糸つむぐ婆がうしろの小屏風にあまた張りたるふる葉
書かな

敗蕉

尾上柴舟

さしわたる葉越しの夕日ちからなし枇杷の花ちるやぶ
かげの道

とほじろく温泉いそのけぶり見えそめて一里かやはら秋の
日あかし

たかむらは煙に鎖ぢてみづくろき城のうちぼりゆふべ
あめふる

七十六

七十七

むらがりてさわたる小鳥かげ絶えぬ裏のくさやまた
秋のかせ

はしりゆく櫓のすゝの音きこゆなり雪の小ばやし月さ
ゆる夜を

芭蕉葉のひろ葉をすべる日のかげにゑがけるごとし雁
來紅の花

みなと江のあしの穂しろきゆふ月夜わが待つ人の船ち
かづきぬ

木^ッ兎のなくこゑばかりして霜枯の木立あらはに月はい
てにけり

すな山をひとつこゆればそなれ松まばらに見えてあき
風のふく

みづうみははなだにわけて朝靄のたゞよふ森になくほ
とゞぎす

むらをさの背戸のいたがき月てりて夜ざりかをれり木
犀のはな

七十八

とぞしたる峠の茶屋の椽に立ちて五百重のやまの雪を
見るかな

小ひつじのまづけき夢やまもるらむ牧場にひくき夕づ
ゝのかけ

かさゝぎの月におどろくこゑはして井のへの桐の露し
とゞ落つ

薄さむきあきのやまばた日はてりて柿のもみぢに四十
から啼く

七十九

さしのこるゆふ日をうけて窓ごしに葡萄とる子の頬う
つくしき

ひつじ逐ひて牧人かへるみづうみのかた岸づたひ舟ひ
とつ行く

あさまだき伯耆路行けばやせ馬の瘦せしひたひに秋か
ぜの吹く

首塚のあととふ嵯峨のあさ月夜たけの夜露の志げくも
あるかな

大砲だいぱうのわだちみだれし野のすゑにゆふべ雨ふりなくほ
とゞぎす

野の宮のくろ木の鳥居かたぶきてあきかせさむし下嵯
峨のさと

秋の日のなごりさむけき巖かけにふねさしよせて蘭の
はなとる

ほのじろくあくた火けぶる山畑のくろのたち木に鴉な
きしきる

さしすてゝあるじはあらぬつり竿にあきつとまねり秋
の川ぎし

あらさぎの低くよこぎるかげ見えて春かせ立ちぬうら
のあし原

ひまもなき杉の志づくに巖が根の一重やまぶきはなち
りすぎぬ

はるくとかすむなは手のやなぎ原むかし送りし人か
へりきぬ

いろくづは橋にかくれてはこ庭のいけになみあり秋の
はつかぜ

霧しろきあきのあさ川鹿朶たきてくだるいかだの影ほ
のかなり

てる月のかげにねぶれるあら蓮のはなうごかして夜の
かせ吹く

真砂路に月てるいその小松やま夜半にこゆればわが加
げ小さき

名もしらぬ鳥のうそぶきこそ絶えて杉のなみ木にあき
風ぞふく

蟬のこゑゆふべにせまるふる寺の庭ひやしかにはぎの
はなちる(高臺寺にて)

雲きえぬ鳥かげ消えぬふねきえぬはるかなるかな秋の
みづうみ

蕎麥畑にむしなくゆふべ門に出て、望の夜ちかき月の
かげ見る

神のまじり

神がきに月はのぼりてこまぬのかたにかしらに梅の
かげあり

さきつやくすゝ菜のすゑにふるでらの塔ちんぎ見えてひばり
なくなり

遠くゆく人のうしろ手見おくれればひとむらしめれ松に
ふりきぬ

かしの實のひとつおちくるとよろきに小魚かげちる山
の井の水

老杉の木の間もゆくるともし火に夜霧ひとすぢ見えわ
たるかな

みちのべの志のもすゝきも霜がれて二十五菩薩がずお
らはなり

茶つみうたかすかにひゞく岡のへに桐のはなちり風ぬ
るく吹く

島がくれ月いでくらし老ろがねのひかりさしたりあら
磯の上に

きつね火のよひに見えたる繩手路の松原づたひなくほ
とゝぎす

をどり子はみな散りはてゝ月ふけし寺のひろ庭たゞむ
しのこゑ

うつむきて鐘樓しゆろうをくだるのりの師のうしろ手さむきゆ
ふ嵐かな

百日紅まばらに咲きてやまでらの庭志づかなり日ぐら
しのこゑ

ろり立つなぎのおほ岳ゆき見えてあき風さむし茅は
らかや原

よろめきて家鴨ひとむれ行きすぎぬ穂たて花さく川沿
ひのみち

垣越しに蛇の目のかさの行く見えてあめなゝめなり連
翹のはな

寒 菊

金子薫園

鳥のかげ窓にうつろふ小春日に木の實こぼるゝおと去
づかなり

枯れはてし蓮田の末にあひる飼ふ家ふたつ見えて秋の
空たかし

うねうねとめぐる野みちたそがれて夕月ほそしつゆ
くさの花

塔ちんぎのさきのみ見えてまげりあふあを葉わか葉にさみだ
れのふる

かゝみ餅すこしくづして走り行くねずみの影のさむき
夜半かな

風をりをり葉蘭にさはる朝庭に小鳥ひとつきて餌をあ
さりゐる

江の北にあけの鐘鳴る志のゝめに落ちくる雁のかげか
すかなり

ふた坪のうしろの庭に菊咲きてほかりほかりと日かげ
のどけき

ふきあれしよべの西かせをさまりてやれし芭蕉に霜う
すく見ゆ

うまごらに手をひかれつゝおんな姫ゆきぬ野でら一里の小春
日よりに

手むけにと植ゑし小はぎの花さきてあさ風さむし母の
ちくつき

あはしまに白きゆかたのほの見えてほととぎす啼く湖
のゆふべ

秋かぜに吹かれふかれてひとつ二つ咲きし朝がほ花の
ちひさき

梅もどきこぼれてさむき窓ちかくよれるめじろの人に
あそれず

うすもやにかくれてそれと見えざりし岡の一つ家朝日
さすなり

枯はすにうすれしゆふ日かげきえて水おとさむく鴨ふ
たつ飛ぶ

玻璃のまど雪夜にわけてとひよりし鹿に餌をやる人う
つくしき

夕なぎに志ほふくくぢら遠く見えて秋のそらたかし天
くさの灘

秋の日の芙蓉のはなにうすれゆくつゝみのあたりわが
舟はてぬ

あひしげる木かげうつりてほのぐろし一すぢほそき谷
川のみづ

ゆふもやはれゆくかたに家見えて垣ほのじろしゆふ
がほの花

さきにほふつゝみの花をよそにしてともはねふれり春
の川ふね

むかつをに聳ゆる塔の朱塗ふりてのこる夕日のかげさ
むげなり

小はる日を出おりくればひよ啼きてふもとの川にわた
し舟ゆく

ふたつ三つとびゆく鳥のかげとほく夕かせわたる茅は
らかや原

峯の寺ゆきにうもれていりあひの鐘の音低く今日もく
れにけり

日あたりの椽にならべぬ鉢うゑのうるしのもみぢまら
ぎくの花

菊ばたのきく見て立てる老人おひびとのせなぬくげなり小はる
日より

ひとむらの芙蓉のはなにかせ見えててらのおさ庭ひよ
鳥のこゑ

畔つきて坂のぼりゆく荷ぐるまのつみし大根おほねにゆふ日
さすなり

露よきのはなかたへに咲ける小はる日の手あらひ鉢ひつに小と
り水のむ

三井寺のかねの音しづむ雨の夜に雁低く啼くみづらみ
のほとり

またゝきてともしうするゝ寒き夜に水仙かをる文づく
ゑのうへ

駕籠二挺たうげにいそぐ夕ぐれを茅ちはら篠ささはらあめに
なりゆく

ところどころもみぢこぼれし椽側えがわに小鳥あそびて晝し
づかなり

ふたつ三つ陸つらみにのぼせし舟見えて富士のねとほし夕ぐ
れのそら

鴨のこゑとほくきこえて更くる夜を御濠のまつに雪志
ろくふる

かれあしのさやぎさびしきゆふ月にひとむらくろし水すゐ
神じんのもり

黄になりて風にみだるゝいてふ葉の大木にはゆる秋の
日さむき

九十八

九十九

ゆふ川に飯いひたくふねのうすけぶりほのかに立ちて雁の
こゑする

ひともとのかれ野のすゑの椎の木に小とりむれるる霜
しろき朝

ゆふ風に茶のはなちれる墓みちを阿伽くみて行く人か
げさむき

風にあけて風にくれゆく枯野はらいなく馬のこゑか
すかなり

清水わくふる井のあたりおもしろし清しうつくし春の
わかくさ

かれ蓮にゆふかせさむき池どののおばしまちかく雁む
れて飛ぶ

まる窓のもとにかくれし水ひきのはな見えそめて蜻蛉^{あきつ}
飛ぶなり

日あたりの窓ちかう咲く山茶花に今日もまたきくひよ
鳥のこゑ

みづらみの上に鶯舞ふ小はる日を矢橋のあたり去ら帆
行く見ゆ

ふたつ三つ蜻蛉^{あきつ}さまよふ小柴がきさびしく立てり日ま
はりの花

みづらみの吹雪になりし夕まぐれ見えみ見えみきみ
が舟行く

叙景詩完

叙景詩掲ぐる所、皆文藝雜誌『新聲』より抜け
るもの新聲歌欄は金子薫園君選評の下に、う
ら若き詩人が、滿腔の情思を洩す所。滔滔た
る現時の新派和歌なるもの、淫靡猥雜誦す
るに堪へざるなかに在りて、聲調流麗、溫藉
にして雅馴なるものは、唯新聲歌欄あるのみ。

明治三十四年十二月廿八日印刷
明治三十五年一月一日發行

定價貳拾五錢

不許
複製

編輯者兼
發行者

佐藤儀助
東京神田區錦町二丁目六番地

印刷者

佐久間衡治
同牛込區市ヶ谷加賀町一丁目
十二番地

印刷所

株式會社 秀英舎第一工場
同牛込區市ヶ谷加賀町一丁目
十二番地

發行所

東京神田錦町二丁目
電話本局二八五二番

新聲社

小栗風葉君著

小説 梢の花

ア カ ツ キ 第 一

特製頗
大判百餘頁
定價十八錢
美本
郵税金四錢

表紙…………アカツキ(石版十)…………一條成美君筆
口繪…………野外の訣別(寫真銅版)…………渡邊審也君筆
附録…………新春繪端書(石版八)…………一條成美君筆

可憐梢上一枝の花、戀を與へて戀を奪ひ、芳芽空しく地に委せしめんとしたるものは、是れ奇險なる時代の思想なる也。『梢の花』は、實に群小作家が滔々風を逐うて織巧猥雜の作を列ぬるの時、獨り自ら進んで此時代の思想を描けるもの、着想最も大膽、且つ巖絶。文字絢爛を極めて人をして戀の芳香に酔はしむ。文藝革新の大抱負を有せる我『アカツキ』が第一編として、斯くの如き小説界空前の傑作を紹介するを得たるを深く喜ぶ。

アカツキ

は月刊の新作文庫也、最も進歩せる思想を描ける小説又は美文(百頁以上)を掲ぐ、表装挿畫亦之に遜らざる清新の趣致あるもの、み也。
定價一部十八錢郵税金四錢…六冊前金郵税共金一圓二十錢

著 君 明 有 原 蒲

ば か わ 草

畫 君 也 審 邊 渡

晚翠遙に南歐の地にさまよひ、藤村はみすゝかる信の山に在り。中央韻文壇の覇權を握る者は、實に我蒲原有明子也。子の詩、幽遠崇高の調を以て、清新奔放の想を歌ふ。戀に惱むの涙あり、世をうれたむの血あり、自然を讚するの情あり、之を掩ふに七五の辞、五七の調を以てし、抑揚自ら節に中り、抗墜心に適ふ。激する時は悽愴人の心を寒からしめ、温まる時は、艶妖眼を眩せしむ、其多彩絶美の手腕は、眞に韻文壇を獨歩するに足る、宜かる哉一部の青年其詩を學びて、有明調あるもの、至る所に見るに至れるや。我社即ち子に乞うて、子が得意の作數十篇を集めて『草わかば』と題し、壬寅韻文壇に多大の光彩を添へんとす。

錢 四 稅 郵 * 錢 五 廿 價 定

新派畫家 一條成美君著

(製本既成)

新 派 彩 畫 法

全一冊 定價廿五錢
頗美本 郵稅金四錢

著者一條氏は獨特の描線と獨創の色彩法とを以て新一旗幟を樹てたるの士、其超凡の手腕を有するまとは、氏の作物の大なる歡迎を受くるに看て知る可し。此書は實に氏が特長の彩管を揮つて、多年研究の結果を發表したるもの、一見直ちに色の配合、彩色の按配、運筆の方法を知り得可く、以て水色嵐光筆に任せて浮び、畫布板上自然の聲を聞くの妙境に臻る可し。此書は實に新時代彩畫の絶好模範たる也。

阪井久良伎君著

珍 派 詩 文 へ な づ ち 集

全一冊

定價十五錢
郵稅二錢

題して『珍派詩文へなづち集』と云ふ、題目既に奇、内容奇ならざるを得んや。著者は一代の警句家阪井久良伎君、其獨特の快筆を揮うて所謂珍派文學を鼓吹す。書中、評論あり、隨筆あり、和歌あり、狂言あり、落語あり、萬態一ならずと雖も、飯する所は彼春和歌を嘲り、所謂新詩人の敗徳を罵れるもの、一讀哄笑を禁ずる能はざらしむ、而も笑のうち涙あり、滑稽のうち諷刺あり、著者は眞に明治文壇を憂ふるの士たる也。

毎日新聞主筆 島田三郎君序
 國民新聞主筆 徳富猪一郎君序
 文學博士 高楠順二郎君序

大日本文章學會

能文大成

總金 頗紙 七百七十頁
 文庫 本數

講述者

文學士 大町桂月
 文學士 久保天隨
 文學士 內海月天
 文學士 十時敏彌
 文學士 杉桂華
 文學士 江藤鶴林
 文學士 大沼芳則
 文學士 山川其他數名

定價二圓六十錢 (日方八百) (勿送包送)
 此際申込者には小包料全免
 * * * * *
 本書は一流の名家が、各専門の智識を傾倒して、能文の眞訣を説きたるもの、一讀よく文章の蘊奥に通ずるを得可し購讀者には本會生徒の資格を與へ文章の無料添削の特典を與ふ

文章作法 能文要訣 文章百話 文法解剖 日本文典 修辭學 審美學 美辭類纂 日本文章史 日本文人傳 名家文粹 新聞學講義 國文評釋 英文評釋 漢詩評釋

在大學院文學士 久保天隨君著述

東西文豪評傳 (卷壹)

全一冊

定價廿五錢 郵稅金四錢

弱者の聲

弱者の名の下に權利は壓せられ、枉屈伸ぶるに所なき者に代りて、其筆となり、其舌となり、大叫喚、大絶叫、之を天下に訴へ、且つ彼等に一道の慰安を與ふ。

目次

牢獄に接近せよ 田口柳汀
 富者の福音 正岡梅溪
 薄倖の學 高須梅溪
 紡績の女工 生田葵山
 弱者の慰安 高須梅溪
 可憐の兒 奧村梅溪
 貧しき者は幸也 高須梅溪
 弱者の奴隸 高須梅溪

田口柳汀 正岡梅溪 高須梅溪 生田葵山 高須梅溪 奧村梅溪 高須梅溪

價十二錢 郵稅四錢

從軍記者 佐藤紅綠君著述

從軍決死隊

從軍畫家 石川欽一郎君畫

價廿五錢 郵稅四錢

著者昨年北清の戰に從ふや、四名の同志と決死隊を組織して、彈丸の間に親しく戰を觀る、今其縱石の酒脱の文を以て之を挿畫し、奉り宛と軍畫の伯成り
 天覽 挿畫 奉り

山口中將、福島少將題 渡邊男爵、諏訪子爵題

矢崎少尉

身に卅創を被りて北京城外* 價廿錢 に斃れたる青年武人の典型* 郵四錢

高等師範教授
在大學院
文學士 登張竹風君序文
文學士 尾上柴舟君譯著
(第二版)

ハイネの詩

卷頭、ハイネの肖像(寫真版)
頗美本 定價二十錢
郵稅四錢
附錄、ハイネ評傳(三十頁)

戀の征矢に胸を射られ、薄倖の命運に身を悲しむ者は、來りて『ハイネの詩』を誦せざや。ハイネは獨乙叙情詩人の尤あるもの也。その詩優麗にして輕妙、裡に炎ゆるが如き情熱あり。戀を歌ひ、人生を歌ひ、運命を歌ひ、乙女を歌ひ、故國を歌ふ。柴舟氏滿腔の精力を傾倒して之を譯す。豊富の詩才、艶麗の詩筆、巧みに其面影を傳へて、薄倖の詩人の面目躍如たらしむ。蓋し獨乙詩人の詩集翻譯の嚆矢にして、短歌新體詩の作者を裨するとの大なるべきは勿論、一般文壇に志を寄する者の好侶伴也。

懸賞詩文集

桂花集

插畫 落葉彩接花色
書畫 葉虹木園刷
一條成美君筆

『新聲』紙上、賞、百金を懸けて弘く募集したる小説、美文、論文、詩歌、俳句、等を掲げたる者。天下の俊髦此の一卷に集りて、横の才筆を競ふ、青年文壇の偉觀也。

附錄
雁影 金子薰園
ちぎれ雲 田口菊汀
題桂花集 高須梅溪
亡國の韻 正岡藝陽
遊仙窟と紅樓夢 奥村梅阜
とを論ず

定價 全一冊 十二錢
郵稅 四錢

正岡藝陽君著

(大判全一冊 * 定價貳拾五錢 郵稅四錢)

嗚呼賣淫國

卷頭 寫真
新橋梅香 伊藤博文
市村家橘

次目

賣淫國とは何ぞ 醜業婦を有せる社會 賣淫學生 賣淫の首府
當代の淫猥作家 牡丹侯を戴ける社會 賣淫文學 田園の淫風
優柔不斷の社會 奇怪なる賣淫の現象 姦淫詩人 モルモン宗
其他 數項

新聲社同人著

明治文學家評論

表紙畫 全一冊 定價三十錢
百穂君 郵稅金四錢

次目

三宅 雪嶺 福地 櫻痴 島田 三郎 岩本 善治 江見 水陰
竹越 三又 内村 鑑三 幸田 露伴 田口 鼎軒 國府 犀東
高山 樗牛 松村 介石 山路 愛山 大町 桂月 田岡 嶺雲

高須梅溪君著
平福百穂君畫

暮 雲

價十二錢 郵稅四錢

梅溪子の美文は、優に文壇を横
行するに足る。其辞の清麗、其
想の秀雋、誰かよく比し得るも
のぞ。(製本已成)

- 次 目 雲 暮
- | | | | | | | |
|------|------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 夏の田園 | 秋の追憶 | 風の音づれ | 海のほとり | 御茶の水橋 | 暮畔の懐ひ | 澱江を懐ふ |
| 少女 | 深林 | 幻影 | 牽牛花 | 曙の星 | 夕陽 | 鐘聲 |

空前の美本

一 體裁新奇、本文色刷
用紙舶來上等光澤紙
袋、表紙、扉、挿畫色刷
印刷製本等精巧を極む

多恨の遊子、身は獨り、一壺の酒を友に湘南に遊
ぶこと旬日、滿囊の詩想を披いて此著あり。景情
双絶、詞彩煥發、一卷是れ無韻の詩、とりて水晶盤
裡に盛るも可也。體裁美を極め麗を盡くして、我
社が明治文壇有數の傑作を遇するの微衷を現す。

川上眉山君著

定價廿六錢 郵稅四錢

ふとろ日記

一條成美君畫

明治文藝の精華



| | | | | | | | | | | | | | | | | |
|------|------|-------|------|------|-------|-------|-------|------|------|-------|-------|--------|-------|------|------|------|
| 文藝雜觀 | 詞賦理想 | 文壇の理想 | 新舊理想 | 社會小説 | 渴望の小説 | 家庭の低説 | 趣味の低説 | あぐり火 | 星く火 | 行く水懸賞 | 人民の詩人 | 道ゆきの文學 | 俳人の惟然 | 西園寺侯 | 黒岩 | 森鷗外 |
| 西園寺侯 | 福池櫻痴 | 竹越三又 | 戸張竹風 | 大隈重信 | 島田三郎 | 鳩山春子 | 志賀重昂 | 小栗風葉 | 三島霜川 | 東花庵 | 柳内蝦洲 | 赤堀又二郎 | 佐藤紅綠 | 正岡陽 | 緒方流水 | 高須梅溪 |

(文藝文美)

| | | | | | | | | | | | | | | | | |
|------|----|----|------|------|------|-----|-----|-----|-----|-----|------|------|------|------|----|-----|
| 東北漫吟 | 毛虫 | 田植 | 魚山の記 | 喇嘛行者 | 嘯水十韻 | 秋雜吟 | 鏡夕浦 | 五串溪 | 松下吟 | 松下吟 | 露人の歌 | 野人の歌 | 古き聖書 | 江島雜詩 | 朝霧 | いと萩 |
|------|----|----|------|------|------|-----|-----|-----|-----|-----|------|------|------|------|----|-----|

| | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------|------|------|------|------|------|----|------|------|-------|-----|------|------|------|------|------|------|
| 佐々木信綱 | 内藤鳴雪 | 高濱虛子 | 菊池幽芳 | 國府犀東 | 服部躬治 | 碧梧 | 中村春雨 | 本田種竹 | 久保猪之吉 | 四方太 | 高橋山風 | 生田葵山 | 野口寧齋 | 金子薫園 | 尾上柴舟 | 落合直文 |
|-------|------|------|------|------|------|----|------|------|-------|-----|------|------|------|------|------|------|

繪畫

| | | | | | | | | | | | | | | | | |
|----|----|----|----|----|----|----|------|-----|----|----|---|---|---|---|---|---|
| 長虹 | 聖母 | 蓮池 | 海邊 | 初秋 | 泰西 | 肖像 | 竹越三又 | 賀重昂 | 春子 | 東○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 成美 | 同 | 素明 | 審也 | 百穂 | 名畫 | 十面 | 志 | 山 | 犀 | 香 | 郎 | 香 | 郎 | 香 | 郎 | 香 |

新歸朝者著

滑稽なる日本

定價十二錢 郵稅一錢
日本の社會を滑稽なり
とあし、漫罵冷嘲、奇風
警の論、快絶の字、送迎
に違あらざるの概あり發

正岡藝陽君著述 (増補第四版)

時代思想の權化 星亨

大判 定價廿五錢
洋製 郵稅金四錢

一代の梟傑星亨、彼は已に歴史の人とされり。嗚呼五十年の長き歴史は、いかなるものを吾人に教へたる乎。藝陽子、彼を以て黄金權勢の外何物もなき明治時代思想の權化なりとあし、縦横、其人物性行を論ず。觀察奇警、論斷的確、殊に世人の未だ知らざる星の平生を紹介する所趣味極めて多し。

南風館編輯部編
鏑木清方 平福百穂二君畫 (小説集)

まごも集 定價三十錢
郵稅金四錢

次目
——
● 二人の海
● 一節切
● 道すから
● 浮萍物語
● 尾花が濱
● 春葉
● 春雨
● 葵山

正岡藝陽君著 (第二版)

新聞社の裏面

社會の秘密を摘發する新聞社には、いかなる秘密が籠れる。白聖の大館其門戸を固うして容易に人の窺ふを許さず。唯茲に秘密の鑰を握れる者藝陽子あり、縦横の筆、最も詳密に、最も痛切に、其秘密を發き、私行を暴露して刺すなし。

第一 婦人の使命

佳人讀書(色刷)
一條成美君畫
鳩山春子夫人肖像

第二 婦人美觀

小女(色刷)
一條成美君畫
(洋畫) ラファエル筆

月刊婦人叢書 ◎定價 一部廿五錢 六部一圓四十錢
郵稅金四錢 每卷讀切

第三 女學生

女學生(色刷)
一條成美君畫

第四 社交の女王

近刊

文藝學士寺內至誠君述 新婦人觀

蒲原有明君歌 生田葵山君著
一條成美君畫

自殺

價廿五錢 郵稅四錢

自殺は果して罪ありや、自己の生命を自己の手にて亡すは、果して罪ありや、此物語は之に向て説く所あらむ。
世人は往々戀と同情とを混同す此物語を讀て、其誤解のいかに大なる悲劇を來すかを知れ。
篇中に虐殺あり、然れども其方法のいかに文明的にして、正々追らざるかを見よ、主人公を一個のウエルテルズムの感念に裝はれし人と思はれ、そは大なる僻事なり、男子の休面川此一語を重じて劍と銃とを握りし人も

大學院文學士 登張竹風君序
文章學會講師 山川芳則君著

美文評釋

全一冊 菊判 定價廿五錢 郵稅四錢

本書は、露伴、鵬外、眉山、桂月、一葉、樗牛、天隨、馮虛、姑射等十家の作中、散文詩と稱するに足るべき美文を評釋したるもの也。其評は嚴正にして、微疵尙ほ許さず、之を指摘して後進の誤を避けしむるが如き、從來の評釋書類の、單に原作者を贊するを事とすもの、比に非ず。

高須梅溪君著

青年觀

全一冊 定價十二錢 郵稅四錢

青年の意氣銷磨せるや久し矣。之を鼓吹し、之を指導するものは誰ぞ「青年觀」は最も忠實なる指導者也。最も熱誠なる鼓吹者也。全篇章を分つと十卷先づ、青年の本質を精論して、熱血淋漓たる「卷末の絶叫」に終る、文氣雄健、論議正大、光芒燦として眼を射る、眞個文學界の雄觀。

新聲社同人作

青葉蔭

全一冊再版 定價拾五錢 郵稅金二錢

夏の野邊 蒲原有明 ●夏の田園 高須梅溪
夏の都府 田口掬汀 ●夏の水草 金子薫園
夏の深林 正岡蕨陽 ●夏の海畔 西村醉夢
夏の追懷 奥村梅臯 ●夏の放言 崑崙山客
表紙百 繪口書

妖堂居士著

文壇樂屋觀

定價拾五錢 郵稅金二錢

文壇の下げ幕切つて落せば、捧腹すべきと極めて多し。妖堂居士例の鼻の如き眼を以て、闇中捕捉し得たる幾多の奇談珍話を、流麗なる快筆に彩りて、之を世に傳ふ、一章一話、趣味溢る、斗りにして、讀過一再、塵情忘却し去るべき也。

大日本文章學會編纂

文章形容辭典

類本 本書は古今の文學書より出所出しき形より出所出しき形容語を集め、順に從つて次第し、難解の句には、一々明細なる註釋を附せらるるなど、用意極めて親切也。此書極めを机上に置く時、は形容の辭句に苦むると、筆端窘束するの患をかゝるべし。

定價參拾錢 郵稅四錢

わか草

定價郵稅拾錢

春雨、烏水、葵山、梅溪、薫園、醉茗、露葉、荷葉、花外子等の小説美文を收めたる者。

森鷗外先生序文 〔六〕 質問自由
大下藤二郎君著

水彩畫の葉

全一冊袖珍
定價二十錢
郵税金四錢

丁寧懇切、微を穿ち、細を明かにし、毫も素養なき初學の士をして、尙ほ且つ其堂奥に入るを得せしむる寶典也。各學校の修書參考書として續々採用せらる。

河東碧梧桐君著

俳句評釋

全二冊
定價卅五錢
郵税金四錢

俳句は詩形の短小なるが故に、簡警朦朧を主とし、餘情を含蓄せしめ、且つ故事歴史等を援引し來るが故に、解し得可からざる者極めて多し、本書は此缺點を補ふものにて、古今の名句を選び、丁寧懇切なる註解を加へ、且つ嚴正なる評論、其價値の存する所を明かにす。

新聲社同人著 (第四版)

三十棒

定價二十錢 郵稅四錢

『大坂毎日』批評 勇往の文縦横 筆、氣焰天に揚るの意氣あり、この抱負ありて、以て文壇に馳騁するに足る、亦一讀すべき好冊子也。

墳墓

定價二十錢 郵稅四錢

本書は人生の安息所とも云ふべき墳墓を描きたるもの、文字流麗、金聲にして玉振、まさに朗々高く歌ふ可し。

大町桂月君序 小林柳村君著
一條成美君畫 山中古洞君畫

戀愛と文學

全一冊美本
定價貳拾錢
郵税金四錢

戀愛!!!あれ實に人間最高の情想に非らずや。人世あれが爲に趣味あり、之が爲に平和あり、「戀愛と文學」ありて、亦長く青春の子女を慰む可し。行文艶麗、卷中の佳所は、朗々高く歌ふに足る可き者あり。

正岡藝陽君著 (六版)

婦人の側面

全一冊美本
定價二十錢
郵税金四錢

世、本書の如く大膽に婦人を解剖したるものなく、本書の如く公平に婦人を論評したるものなし。流麗快暢、趣味湧くが如き文字の間に、婦人の光明と闇との両面を説明し盡くして、亦遺憾なし。

白露集

(總クローズ類美本)

文學士 久保天隨君 合著
文學士 淺野馮虛君
文學士 戸澤姑射君

中村不折君 畫 四版
下村爲山君

此集は、戀や、無常や、運命や、人の世のあはれの數々を描きたるもの也。人生の運命を知らんとする者、自然の奧秘を叩かんとする者は此集を繙け。若しそれ其文に至りては、誠に當代の絶品、艶麗豪宕悲慨、皆其妙を極めて、一語一句鏗然耳に徹し、煥然目を奪ふ。

新 作 小 說

新 婚 旅 行

徳田秋聲君
生田葵山君 合
田口掬汀君 著
西村渚山君

参 版
全一冊洋裝
挿畫四色刷
定價卅五錢
郵税金四錢

結城素明君 挿
一條成美君 書
平福百穂君
渡邊香涯君

田山花袋君著

野 の 花

定價三十錢 郵稅四錢

我に初戀の佳人あり、半生の苦
樂共にせんと、心に誓ひるしに、
斗らざりき、我を懷うて日夜懊
惱、身神衰へ行く少女あらんと
は。其人賢にして美、殊に振分
髪の幼馴染あるに至りては、情
緒いかで亂れざるを得可き、嗚
呼都べての障礙を排して、清き
初戀を保つは是乎。我爲めに不
遇の戀に泣く人の情を受くるは
是乎。這般戀の惱みを描けるも
の、『野の花』の一卷とす。行文
綿麗にして描寫精細。

河東碧梧君序 寒川鼠骨君著
大橋文學士序文

斷 霞 錄

全一冊洋裝
定價廿五錢
郵税金四錢
青山白雲と市井紅塵とを問はず、輕妙洒脫の筆を
以て縱横に描く。而して其描寫の精細ある、厘毫
の微尚ほ遺さずして、讀者をして身親しく其境に
在るの思あらしむ、夏季臥遊の友となすべし。

緒方流水君著

塵 影 錄

全一冊再版
定價參拾錢
郵税金四錢
流水君の論議最も大膽、忌む所なく憚る所なく、
恨を天下に買ふを辞せず。觀察極めて奇警、常に
他に一步を先じて縱横の抱懷を吐く。『塵影錄』は
れ明治文學の側面觀ある也。

二 版 出 來

露伴 柳浪 眉山 魯庵
水蔭 宙外 鏡花 風葉
抱月 天隨 鳴雪 直文

創 作 苦 心 談

本書は上掲十二家の談話を輯録
したるものにして、創作の苦心
談あり、作者の経
歴談あり、文壇に
對するの氣焰あ
り、興味の多きは
論なしと雖も一面
に於いて小説美文
和歌俳句の作法を
作者の経験に照ら
して説けるものな
れば、創作上の參
考書として他
に比するものな
かるべし。
○定價貳拾錢 郵稅四錢

像 肖
不知庵 柳浪 鏡
萩の舍 鳴雪 風
水蔭 及其庭園 葉花

青年文壇の堅

新聲

月刊文藝雜誌

新聲は文學美術の界に大雜誌也。掲ぐる所の文、韻文、雜錄等。『主張』欄は、社中同人の虹霓の氣を吐く所にして、文藝小觀、社會時言の二に分つ『人物』の文士月旦と、文壇風聞記とは、他に比を見ざる者、一は森嚴の筆當代の名家を評論し、一は文壇の奇譚珍話を網羅す。『餘材』の甘言苦語には、文學美術社會者、鋭刀を揮うて、斬を試むるあり、言、文學美術社會演劇の各方面に亘りて、百人百様の觀察、亦一代の奇觀也、其他の諸欄皆青年文士の熱血にあり、一篇一章三語に、價せざるは、大に、美術的趣味を、吹せんが、而して、昨年のより、は、大に、繪畫を、每號十數面を、掲げ、明、一條成美、平福百穂、繪畫を、泰西の名畫を、我、其他、新派畫家の、筆に、あれる、製して、出、時々、文士の肖像を、古、代の、繪畫を、寫真銅版に、製して、用、外、形、の、完、美、鮮、明、の、如、載、す、而、旭、日、の、天、に、朝、する、勢、を、以、て、文、壇、を、横、行、潤、步、し、て、滿、紙、の、光、澤、紙、の、内、容、外、形、の、完、美、鮮、明、の、如、き、新、聲、旭、日、の、天、に、朝、する、勢、を、以、て、文、壇、を、横、行、潤、步、が、今、マ、至、れる、は、眞、に、偶、然、に、非、る、也。

定價 一部拾貳錢、六部六拾六錢、十二部壹圓廿錢
郵稅 一部一錢、六部六拾六錢、十二部壹圓廿錢
○每月一回十五日定期發行○

全六部冊完成

評釋叢書

| | | | | | | | |
|----|-------------------------------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 定價 | 第一部二十錢○六部前金郵稅 共金壹圓四十錢○各編讀切 | 第六 | 第五 | 第四 | 第三 | 第二 | 第一 |
| | | 古詩評釋 | 英文評釋 | 國文評釋 | 俳文評釋 | 漢文評釋 | 漢詩評釋 |
| | | | (版二) | (版二) | (版二) | (版再) | 切品 |
| | | 久保文學士著 | 淺野文學士著 | 內海文學士著 | 阪本文學士著 | 久保文學士著 | 久保文學士著 |

青年文學叢書

| | | | | | |
|------|------|------|------|------|-------|
| 第六 | 第五 | 第四 | 第三 | 第二 | 第一 |
| 青年文學 | 韻文作法 | 論文作法 | 美學大要 | 美文作法 | 文學攻究法 |

米國文學士著述
江藤桂華君著
全部六冊
十錢郵稅
六部前金郵稅
共六十錢

農學士 柳内蝦洲君著述

學生叢書

全部十册 每月一回發行 定價一部十八錢○郵稅四錢。十部郵稅共壹圓九拾錢。

每日新聞主筆 島田三郎君序

第一 廿世紀の學生

訂正再版

世紀一變、舞臺は二十世紀に入りて、日東帝國の面目將に一新せんとす。此間に處して、名を擧げ業を成さんとする學生は、いかなる道を辿り、いかなる方向に進む可き乎。『二十世紀の學生』は一卷十章、之を説き、之を教へて亦餘蘊なし、加ふるに文辭流麗、論旨嶄新、彼拙劣無趣味なる文字を以て學生を教ふる世の教育者先生と同一の比に非ず。今回再版出來す、弘く閱讀を待つ。

農學士 志賀重昂君序

第二 東都と學生

附錄 東京學校一覽

東都は果して學生の天國なる乎、はた墮落の階段なる乎、東都十萬の學生皆之に惑ひ、地方負笈の志ある者亦之を疑ふ。本書は東都の學生の内情、及び其周圍の實狀を明叙して、一毫掩はず。在京の學生を規し、鼓吹し、獎勵すると共に、上京せんとする地方の青年の心得を説くと詳細を極む。巻端、志賀重昂君の學生に關する論文を掲ぐ、滔々數千言の大文字。

青山學院總理 本田庸一君序

第三 學生と生活

既刊

東北の奇傑、教界の偉人本田庸一先生は本書に序して曰く「苦學といへる事は現時の一問題となれり、之に向つて説くもの日に多きを加へつゝあるは喜ぶ可しと雖も、よく學生社會の狀態に照し、學生をして安じて自活獨立せしむるの法を講じたるものに至つては亦見る可からず、柳内農學士の近著『學生と生活』はよく此缺點を補ふもの、時の必要に對して一の好資料を給せる也」云々。

注文規定

右目録中に掲げざるものは、總へて品切とす。増版出來の際は更に廣告す可し。

注文は一切前金とす、郵券代用は一割増たる可し。

注文書籍中、品切のものあるときは、直ちに其旨通知すべきにつき、購讀者は他の書籍に変更せらる可し。

送附の金圓に剩餘あるときは、返金の煩を避けて、金圓相當の圖書切符を發行す。購讀者は次回注文の際、代金の中に加へて送らる可し。

返信を要する時は、往復端書又は返信郵券封入するを要す。

注文狀の宿所氏名は、正楷にて認められたし。字跡亂雜あるは書籍不着の原因とあると多ければ也。